

患者さんへ

東北労災病院消化器外科では日本胆道学会と東北大学が行っている多施設共同臨床研究に参加しています。胆嚢癌の診断（疑い診断含む）で当科にて治療を受ける患者さんはすべて対象となります。本研究は治療法の選択の伴わない、診療録、画像、検査のデータ収集を行う観察研究で、データも匿名の処理が行われますが、参加（登録）を希望されない方は担当医まで申し出ていただきますようお願いいたします。

研究の詳細は以下の東北大学の公開文書（抜粋）を参照ください。

「情報公開文書」胆嚢癌の診断と治療方針・予後に関する前向き観察研究

1. 研究の対象

2017年10月～2019年9月に胆嚢癌の診断を受けられた方

2. 研究目的・方法

切除が可能と判断された胆嚢癌に対する至適術式は、切除術後の病理結果解析から導き出された後ろ向き検討がいくつか報告されている。しかし、胆嚢癌の予後規定因子とされるリンパ節転移の術前診断正診率は低く、手術前の診断から最適と考えられる手術術式の判断は、各施設・主治医ごとに様々であるのが現状で、エビデンスレベルの高い確立した治療方針が存在しない。

さらに、これまでの胆嚢癌の治療方針・予後検証は切除例の病理結果及び非切除例の死亡例の後ろ向きの検証からでのみ報告されている。このため胆嚢癌の根治的治療が根治切除のみであるにもかかわらず、術前診断の視点から見た至適術式や治療戦略の報告は皆無である。この背景には、診断の困難さと、進行胆嚢癌の手術適応が限られるため本邦の胆道疾患ハイボリュームセンターにおいてさえも、胆嚢癌の治療件数が5～10件/年程度である事があげられる。

胆嚢癌の国際的オピニオンリーダーであるべき本邦から、現状を打破し胆嚢癌の術前診断から至適な治療方針を導くためには、前向きな症例登録が必須である。

そこで、胆嚢癌において、診断時情報から導き出される最適な治療方針の候補を、前向き観察研究で明らかにする目的で本研究を施行する。

本研究は前向き観察研究・コホート内症例対象研究で研究期間は2017年10月～2022年3月である。

3. 研究に用いる試料・情報の種類

病歴、治療歴、治療効果、副作用等の発生状況等

4. 外部への試料・情報の提供

集計された結果は日本胆道学会に提供します。

データセンターへのデータの提供は、特定の関係者以外がアクセスできない状態で行います。対応表は、肝胆膵外科の研究責任者が保管・管理します。

5. 研究組織

日本胆道学会	海野 倫明
東北大学病院	海野 倫明
名古屋大学	廣岡 芳樹
埼玉医科大学国際医療センター	良沢 昭銘
新潟大学大学院	若井 俊文
北海道大学	平野 聡
山形大学 医学部	木村 理
宮崎大学医学部附属病院	七島 篤志
愛知県がんセンター中央病院	原 和生
済生会熊本病院	高森 啓史
三重大学病院	伊佐地 秀司
山口大学大学院	永野 浩昭
自治医科大学	佐田 尚宏
川崎医科大学総合医療センター	河本 博文
大阪市立大学大学院	久保 正二
帝京大学医学部附属病院	田中 篤
東京医科大学茨城医療センター	鈴木 修司
東邦大学医療センター大橋病院	渡邊 学
東北医科薬科大学病院	片寄 友
兵庫医科大学	藤元 治朗
豊橋市民病院	松原 浩
九州大学大学院	中村 雅史
手稲溪仁会病院	瀧沼 郎生
広島大学大学院	村上 義昭
札幌医科大学附属病院	木村 康利
東海大学医学部	中郡 聡夫
横浜市立大学	遠藤 格

富山市民病院	北川 裕久
福岡大学筑紫病院	植木 敏晴
藤田保健衛生大学版文種報徳會病院	乾 和郎
松阪中央総合病院	田端 正己
金沢医科大学	小坂 健夫
獨協医科大学	窪田 敬一
倉敷中央病院	河本 和幸
仙台市医療センター仙台オープン病院	伊藤 啓
大阪国際がんセンター	和田 浩志
平塚胃腸病院	藤本 武利
大阪大学	江口 英利
筑波大学	倉田 直正
野崎徳洲会病院	小野山 裕彦
東京女子医科大学	山本 雅一
千葉大学大学院	大塚 将之
岡山大学	加藤 博也
尾道総合病院	花田 敬士
日本医科大学付属病院	谷合 信彦
神戸大学医学部附属病院肝胆膵外科	福本 巧
長崎大学	江口 晋
福西会病院	山下 裕一
東邦大学医療センター大森病院	五十嵐 良典
熊本大学	馬場 秀夫
岐阜市民病院	向井 強
東北労災病院	成島 陽一
金沢大学	太田 哲生
宮崎市郡医師会病院	甲斐 真弘
宮崎県立宮崎病院	大内田 次郎
久留米大学医学部	奥田 康司
国立がんセンター中央病院	奥坂 拓志
杏林大学医学部	杉山 政則

【当院での問い合わせ先】

東北労災病院

〒981-8563 仙台市青葉区台原4丁目3-21 電話 022-275-1111 (代表)

外科 (消化器外科) 成島 陽一